

## 緑の回復と清き水を目指して

山水の美しい姿を現す「山紫水明」は、まさしく、長野県の形容詞であります。美しい山々は、起伏に富んだ山塊と多様な森林です。山々は清らかな水を育み、これらを源とする幾多の河川は、私達の生活を潤し続け、多くの文化を育ててくれました。これらは、大自然の営みと、先人たちのたゆみない努力により育み・守られてきました。

四方を山々に囲まれる長野県の、県土の概ね80%を占める森林は、循環資源として、水源かん養や災害防止機能など、多様な機能を有し、「環境の世紀」と呼ばれる今世紀の最も重要な役割を担うこととなります。

然しながら、長野県の森林の多くは、急峻な地形とあいまって複雑な地質構造など、厳しい自然環境下におかれるが故、自然回復が儘ならず裸地化、或いは新たな崩壊地の発生も各地に見受けられます。

これまで私達は、森林の維持造成のため、治山技術を駆使しながら、緑の回復に努めてまいりましたが、とりわけ火山地帯を中心に、強酸性土壌地帯における植生の回復には困難をきたしてまいりました。また、これら崩壊地を源とする溪流は、強酸性水で、魚類や水生昆虫が生息できない、特殊な環境となっており、この酸性水対策は、下流住民の長年の課題ともなっています。

こうした状況に対処すべく、私達は、「植生の回復・森林化が土砂災害の緩衝機能のみならず、地質的要因による酸性水の発生を緩和する」との信念のもと、平成12年度から平成15年度に渡り、「強酸性土壌荒廃地の緑化工」について検討してまいりました。

然しながら、これまでの成果は、4年間という短期間のものであり、今後の継続調査の必要性を感じております。本調査をベースに今後の継続調査や検討、或いは新しい技術開発によって、更に密度の高い指針に進化していくことを期待するものですが、とりあえず「特殊土壌地帯の緑化工の手引き」となる第一歩を踏み出したところであります。ここに、4年間の検討内容を報告することにより、同様の課題を抱え、緑の回生に努力されている方々の、一助となれば、たいへん幸甚の極みでございます。

2004年3月

特殊土壌地帯の緑化検討委員会  
委員長 小林 寿内

